

P. J. H. グリアスン著 中村 勝 訳
『沈黙交易 ―異文化接触の原初的メカニズム序説―』
(東京, ハーベスト社, 1997年7月 (原著 1903年), 213頁, 2200円+税)

文化人類学の古典

野口 明 広

表紙画像

1 はじめに

本書は、P. J. H. Grierson. *The Silent Trade: a Contribution to the Early History of Human Intercourse*. William Green and Sons. 1903.の全訳である。本書は、「沈黙交易」や「市」あるいは「客人歓待」など、文化を異にするもの同士、あるいは異なる共同体に属するもの同士が、品物の交換という動機から、接触し交渉しあう際の方法について、多くの記録を収集し、整理し、検討を加えたものである。

百年以上前に著されたこの書物を、いま読まれるべき古典のひとつとして紹介したい。本書は、原書においても入手しがたい時期が長らくあったらしく、Dalton (1980) は、自ら編集する *Research in Economic Anthropology* 誌の第三巻に、閲覧しにくい経済人類学の古典として全文をリプリントしている。同じころ、日本では栗本 (1979) が本書を論評している。しかし、栗本を例外として、少なくとも日本においては、本書には本来なされて然るべき注目や評価が十分なされてこなかったと私は思っている。これには閲覧が必ずしも容易ではなかったことも関係しているのかもしれない。近年、日本語訳が出版されたことを期に、本書の持つ意義を考えてみたい。

2 文化人類学における古典とは

では古典とはどのような作品だろう。少なくとも三つの条件があると思う。まず第一には、著されてからある程度長い時間が経過した作品であること。第二には、その期間に、多くの人に読まれ、影響を与え、またさまざまな検討や批判にさらされてきた作品であること。第三には、そうした検討や批判を受けてもなお、今日あるいは将来にわたって読み継がれるべき価値を持つ作品であることである。では、今日における文化人類学の古典には、どのような作品を挙げることができるだろう。枚挙にいとまはなく、研究者ごとに、みな違った答えをするのではないか。フレイザーの『金枝篇』、マリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンの民族誌や理論的著作、モース (1973) の『贈与論』やユベール (1983) と共著の『供儀』をはじめとする著作、エルツ (2001) の『右手の優越』やファン・ジェネップ (1977) の『通過儀礼』あるいはデュルケームの著作のいくつかなど。これらヨーロッパの著作を挙げる人もいるだろう。米国の人類学に関心の強い人であれば、ボアズやベネディクト、ミードなどの著作を挙げることもだろう。

しかし、これは私の個人的印象だけれども、今日の文化人類学の動向とこれらの著作との関

わりについて考えてみたとき、これらに積極的な意義を見出そうとする関心の持ち方は、あまり流行らなくなっているのではないだろうか。これには1980年代から90年代にかけて、文化人類学で関心の持ち方が大きく変化したことと関わっていると思う。

3 文化人類学の動向と古典

少しその経緯をまとめさせていただきたい。ただし、これは80年代後半から今日まで学生として過ごしている私の経験による印象にすぎない。心許ない点も大いにあるが、どうかお付き合いいただきたい。

私が学部や大学院修士課程の学生だったころ、これらの作品はまさに古典だったと思う。1980年代には、日本でも文化人類学が大きく注目され、レヴィ＝ストロースの構造主義、エドモンド・リーチやロドニー・ニーダムの理論、ヴィクター・ターナーの象徴論や儀礼論などが紹介され、注目を集めていた。これらの業績の前提として先に挙げたヨーロッパの古典があり、それらを構造主義や記号論の観点から整理した教科書として、リーチ（1981）の『文化とコミュニケーション』があった。この著作もいまでは古典のひとつとされているのだろう。これを足掛かりにして、日本語訳が出版されていたデュルケームやモース、エルツ、ファン・ヘネップなどの古典を読み、また、レヴィ＝ストロースやリーチ、ターナーなどの話題の作品を読むことによって当時関心を集めていた理論の見取り図をおおよそつかむことができたのではないだろうか。もっとも私には、リーチ（1981）は難解で、字面を追うのが精一杯。何について論じられているのかさえ理解できていなかったのだけれども。とにかく、私の目には文化人類学は自足した学問に見えた。われわれと異なる特徴的な文化を持つ他民族という固有の研究対象があり、フィールドワークと民族誌の記述という固有の科学的研究方法があつて、資料を分析するにあたっては構造主義や文化記号論など自前の理論がある。過去の理論が批判され新しい考え方が登場するという変化ももちろんあるけれど、それでも草創期から当時まで系譜を示す太いラインを引くことができる。文化人類学のプロパーというものはリーチ（1981）が取り上げている呪術、儀礼、親族、神話、宗教、世界観などを扱うのものなのだと私は思いこんでいた。また、こうした事柄を説明する上で、ほかの学問があつかう領域、たとえば生態や政治、経済などには関心を払う必要性は乏しいと多くの人類学者は考えているのではないかと思うこともあった。この考えは私の早合点で、当時の文化人類学者の関心も実に多様だったのだけれども、それでもリーチ（1981）は必読の教科書とされ、私のような学生が上のような早合点をしてしまうに十分な影響力があった。

しかし、こうした状況は80年代の終わりから一変した。ポストモダニズムの到来である。90年代のはじめには、私は国立民族学博物館に受託学生としてお世話になっていた。マーカスとフィッシャー（1989）の『文化批判としての人類学』の日本語訳版が注目を集めたころである。私も読んでみたが難しかった。総合学術大学院大学の院生の方々といろいろ話しをさせて頂く機会があったが、この本が話題に登ることが多く、みんな深刻に受け止めていた。大塚和夫先生の指導のもと、院生の方々と一緒にSaid（1989）の"Representing the Colonized: Anthropology's Interlocutors"を読むゼミに参加する機会にも恵まれた。これも難解だったが、みなさんの討論や先生の解説を聞いて、「事態は深刻だ。文化人類学はこのままではいられないようだ。」ということまでは理解できた。こうした批判についての私の理解は心許ないが、理解できた要点を述べさせていただきたい。

西洋の近代文明から隔てられた固有の特徴をもつ文化を生きる異民族という想定は仮構であ

る。人類学が固有の対象としてきた諸民族は、実際には西洋からの植民地支配という政治的あるいは経済的な強い働きかけを受け続けてきた。両者の間には、支配や搾取、服従や従属、順応や抵抗という権力の行使をとまなう関係があり、これらの関係を介して、研究対象とされてきた文化も西洋文化もともに変化をとげてきた。しかし、文化人類学のなかでは、こうした経緯や歴史への関心は乏しく、研究のなかにあまり積極的には反映されてこなかった。フィールドワークや民族誌の記述という方法も、こうした文脈を背景に成立したものであって、はじめから権力関係が刻印されており、中立的で科学的な方法とは言い難い側面を持っている。植民地主義という文脈のなかで、仮構の前提と権力関係が刻印された方法によって成り立っている文化人類学には、この状況を正当化する論理を練り上げてきた学問分野であり制度でもあるオリエンタリズムと似通う点が多い。

こうした批判は、この学問を学問たらしめている前提を覆したように見えた。草創期からつながらる系譜のラインが断ち切られた印象を与えるに十分だった。それまで古典だと考えてきた作品が色あせて見えはじめたとしても、不思議ではなかったはずだ。

こうした批判を受けて、興味や関心のあり方には、少なくとも二つの変化が起こったのではないだろうか。もちろんこれも部分的な見方なのだけれど。ひとつは、政治的あるいは経済的な文脈に対する関心の高まりである。もうひとつには、個々の文化を統一性を持つものとして個別に探求する態度から、他の文化や他の集団との交渉という文脈のなかで常に変化し形作られるものとして理解しようとする態度への変化である。このころから、批判的にはあるけれども、従属理論や世界システム論への関心が高まった。これらへの批判としてあらわれた生産様式接合理論からも着想をえたと思われる *Articulation* (接合：節合) という用語が活用されはじめた。以前にもましてエスニシティへの関心が高まった。サバルタン研究への関心も高まった。こうした事情はこの変化のあらわれとして理解できると思う。この変化は以前から進行していたのだろうけれど、ポストモダンの批判が拍車をかけたということはできると思う。

つまり文化を異にするもの同士、互いによそ者と思いつている集団同士の交渉のあり方に関する興味が高まっていると私は思うのである。

4 『沈黙交易』：文化人類学の古典

前置きが長くなってしまった。しかし、ここまで述べさせていただくと本書『沈黙交易』が、古典として積極的な価値を有するという私の考えも理解してもらえらると思う。本書は集団と集団との交渉を主題として取り上げた著作だからである。これを読むことで、今日の課題に対する見通しが、にわかによくなるわけではない。しかし有益な示唆を見出すことはできると思う。目次は次の通りである。

第一章 序説

第一節 本書の主題と方法／第二節 集団とその隣人／第三節 異人／第四節 要約

第二章 沈黙交易と原初的市場

第一節 沈黙交易／第二節 原初的市場／第三節 論評／

第三章 原初的歓待

第四章 結論

そして訳者である中村氏の解説が末尾にある。

第一章では、近代社会の人間は、相手が仲間内であろうとよそ者であろうと、人間であるという事実に基づいて権利と義務の主体と見なし社会関係を取り結ぶ一方で、近代以前の社会

(原初的[Primitive]という語が使われている)では、同じ集団に属する仲間であるかそれともよそ者であるかによって、処遇がまったく異なる点を指摘している。同じ集団の仲間内においては相互扶助が社会関係の基礎であるのに対し、よそ者に対しては、彼の財貨を奪い取っても強盗にはならず、彼を殺害しても殺人にはならない、つまりよそ者は潜在的な敵として遇されるという点である。さらに、自己が属する集団の領域とよそ者のそれとの境界線に多くの社会は特別な関心を払っている点を指摘している。

仲間内とよそ者に対する社会関係の大きな違いは、ウェーバー(1954,1955)が対内道徳と対外道徳の対立として定式化したものに対応している。ウェーバーは仲間内において無条件の相互扶助をうながす道徳を対内道徳と呼び、よそ者に対しては、相手に不利益をあたえても自己の利益を無制限に追求してよいとする道徳を対外道徳と呼んだのである。近代以前の社会においては、この二つの道徳が共存していたとウェーバーは論じている。

第二章では、まず豊富な事例をひいて沈黙交易の特徴を明らかにしている。沈黙交易は、異なる集団に属するもの同士が、集団が占める領域の境界線上で、言葉を交わさず、事例によっては姿を隠して、可能な限り相互の接触を回避しつつ、互いに必要とする品物を公正に交換しあう方法であることが示される。そして、この背景として、よそ者同士は互いに敵対関係にあることを指摘する。そのような敵から、自分の集団が占める領域で入手できない品物を、武力の行使を伴わず、身の安全を確保して交換する方法として沈黙交易は成立したと説明する。

次に市が取り上げられる。市も集団間の境界で開かれること、交易者の間に強い不信感や猜疑心があること、交易者は危険がある場合はいつでも生命と財産の安全を確保できる用意をして交易に従事しようとする傾向がある点などを指摘して、沈黙交易との類似性を確認する。

また境界線上の市が営まれる場所は中立地帯として、市が開かれる時間は休戦期間として特別な価値が与えられること。この場所ではヘルメスやマーキュリーなどの商業神が祀られ、神聖性が付与される事例が多いこと。これらの商業神は、商業の守護神であると同時に詐欺や泥棒の守護神でもあるという両面価値的性格を帯びていること。そうではあっても市での不正行為や秩序を乱す行為には商業神の罰が下るという信念が確認できること。市での交易に従事する仲介人や集団間の伝言を担う使者もまた、市という空間と同様に神聖視されることなどを指摘している。

第三章では、客人歓待(もてなし: Hospitality)が検討される。前近代社会のなかで、市や沈黙交易と並んで採用される交易方法に、他集団からの旅人と彼を歓迎しもてなす宿主との間での贈答品の交換がある。こうした贈答品の交換を望んで友好の意を表明し所定の手続きをへて他集団の領域に入ろうとする旅人は、客人として歓迎される。迎える側は、宿主となって客人に保護を与え、もてなし、宿泊や食事の世話をする。これは慣習となっており、この慣習に背く宿主は自分の仲間内からも非難を浴び、制裁を受けることになっていたという。なぜなら、潜在的な敵であるよそ者を通じなければ獲得が難しい品物はどの集団にもあり、上の慣習がこうした品物の獲得を可能にするからである。ひとたび客人が宿主の保護下にはいると、宿主は客人を保護する義務を負うが、保護領域から客人が離脱した場合、たちまち宿主は客人を敵として扱い、収奪の対象にしてもかまわないとする習慣がいくつかの社会に見られるという。この事情は、Hospitalityという語の成り立ちを思い起こすと理解しやすい。語の前半を構成する部分は、ラテン語の「よそ者」あるいは「敵」を含意するHospesに由来し、宿主を示すHostという語にも、また客人を示すGuestという語にも語源をたどるとそれぞれ「よそ者」すなわち「敵」という含意があることが示される。宿主と客人は、もてなしを通じて互いに友誼を交換

する関係にあると同時に潜在的な敵対関係にある、すなわち両面価値的關係にあることが示される。また、宿主は客人の保護を義務として負うことから、客人は神聖性を帯びることになるという。さらに両者の関係が血盟兄弟關係に発展する事例が多いことも示される。

第四章では、上に紹介した前近代的な人間關係から、いかにして近代的な人間關係が発生したかについて考察している。交易を支える宿泊施設や旅人の安全を保障する交通手段が整っていない条件では、慣習や法の強制力によって客人歓待を義務とすることで、はじめて交易が機能するのだけれども、上の条件が整うにつれ、この義務を慣習や法の下におく必要は乏しくなり、結果としてこの義務は社会規範に基づくものではなくなる。宿主は客人を自分の援助を必要としているひとりの人間として見なすようになる。こうして、仲間内であるかよそ者であるかに関わらず、相手をひとりの人間と見なし処遇する近代的な人間關係が打ち立てられたとグリアソンは論じている。

岡（1994）によれば、かつてヨーロッパでは商業の起源をめぐって議論があったという。この議論には、二つの立場があった。ひとつは敵対關係を基調とする沈黙交易に起源を見ようとする立場であり、もうひとつは友好關係を基調とする客人歓待に見ようとする立場であった。本書は、二つの立場を総合することに成功しているといえる。仲間内に対する対内道徳とよそ者に対する対外道徳、そして交易の必要という三つの要素が交差する地点から沈黙交易、市そして客人歓待を論じ、三者の共通点を指摘することに成功しているのである。ただし、交易の起源を探求した作品として本書を評価すべきではないと私は考える。むしろ、集團間の交渉はある条件のもとでいかなる方法によってもたれるのかを発生論的にとらえていると評価すべきと考える。つまり、いかなる時代においても、ある特定の条件下においては沈黙交易が採用される可能性はあるのであって、本書はその条件を解明しようとしているのだと私は評価したいのである。

また、1970年代から、文献に記録されている沈黙交易が実際に行われていたか否かについて議論が戦わされてきた（Cf. 栗本1979, Price 1980, カーティン2002）。資料とする記録の多くが伝聞に基づいている反面、実際の觀察に基づくものが非常に乏しいことが否定的議論の論拠になっている。沈黙交易とは、古い不確かな伝聞がさまざまな地域に伝播し、そこで記録のなかに再生産されたものにすぎないという議論である。一方、肯定する立場は、実際の觀察に基づく記録は皆無に等しいけれども、アフリカから日本を含む極東まで実に広い範囲にわたって時代に関わらず夥しい記録を見出すことができる点を強調している。この記録すべてを古い伝承の地方ごとの再生産と見なすことには無理があり、むしろ実際に広く行われていたと考える方が蓋然性が高いというのである。この論争は、どこかで実際にこの交易方法が觀察されない限り決着はつかないだろう。ただひとついえることは、この論争の決着がどうあれ、沈黙交易ばかりでなく市や客人歓待までを視野にとらえ、ひとつの観点から共通点を指摘している本書の論理構成は損なわれることはないという点である。

5 近代社会論の射程

本書の射程には、前近代の社会ばかりでなく、近代の社会關係までがおさめられている。この視点や立論には、ウェーバー（1954, 1955, また1965, 1974も参照）のそれと多くの共通点がある。ウェーバーも前近代社会においては対内道徳と対外道徳が対立しつつ異なる領域に適用されるものとして共存していたことを確認する。そして、この対立は対内道徳と対外道徳の相互浸透という過程をへて止揚され、近代社会が到来したと論じる。ウェーバーによれば、この

過程は西ヨーロッパにおけるキリスト教の普及と中世都市社会の成立という条件によって媒介されて展開したものである。その際、中世都市社会においてキリスト教を背景に発達した血盟兄弟関係の重要性を指摘している。この関係を基礎にして、形式的な契約関係を基調とする近代社会が発展したというのである。

二つの道徳の相互浸透という事態は、私たちに身近な事象からも理解できよう。私たちの社会では、どこであってもどの店からでも必要なものを購入できる。店に入ると丁寧な挨拶で応接されるのが常である。しかし同時に、誰もが潜在的万引き犯であり、常にカメラで監視されているのである。誰もが人として尊重されるべき仲間であると同時に、誰もが潜在的な敵対者なのである。こうした事態は、まさに近代以降の社会関係の大きな特徴であり、前近代の社会においては考え難かったに違いない。ウェーバーとグリアスンの指摘は近代以降の社会を理解する上で、含意に富むことは論を待たない。

6 古典との関わり

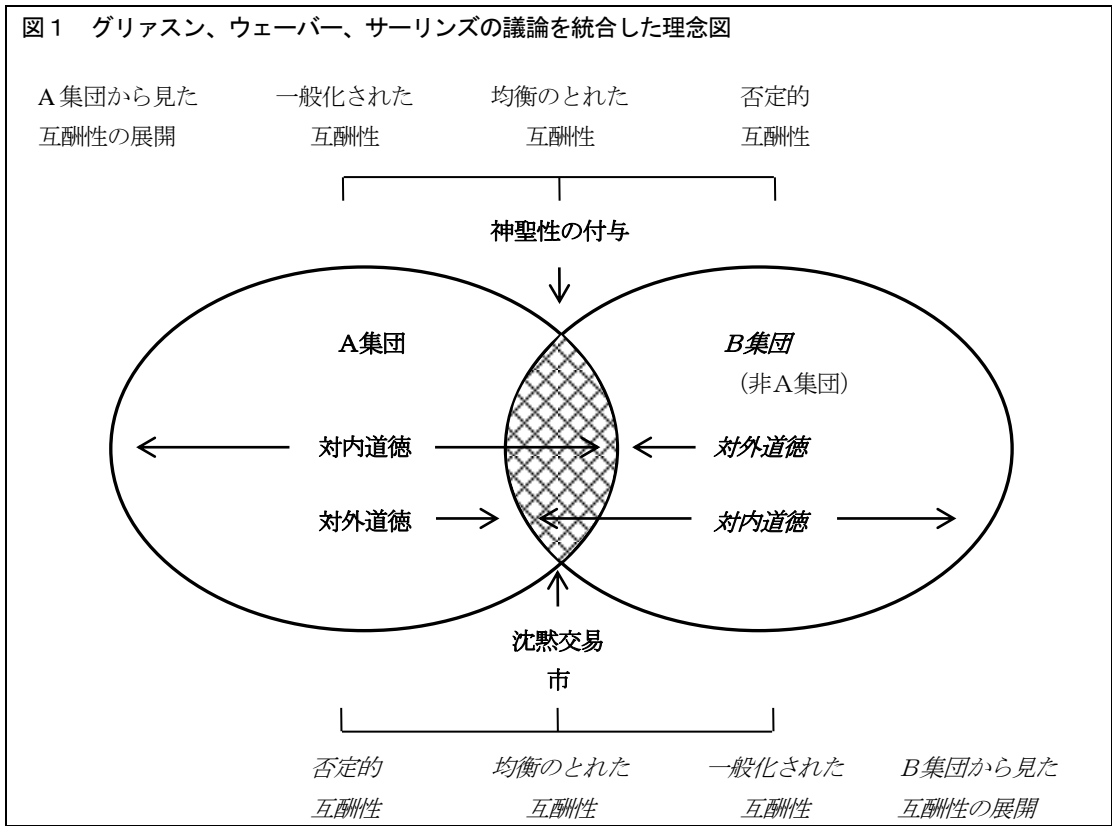
ファン・ヘネップ（1977；ただし原書は1909年発行）の『通過儀礼』がお手元にあったなら、ご覧いただきたい。「旅人の儀礼」をあつかう第三章において、本書『沈黙交易』がレファレンスに掲げられているのが確認できるはずである。ファン・ヘネップの立論において「旅人の儀礼」の検討はライトモチーフを提供している。本書『沈黙交易』が、彼の通過儀礼論に与えた少なからぬ影響を推し量ることができると思う。本書は同時代の著作と互いに共鳴しているのだと私は考えるのである。

先にヨーロッパの古典的著作を構造主義の観点からまとめた教科書として、リーチ（1981）の『文化とコミュニケーション』に触れた。これは、ファン・ヘネップの通過儀礼論、モースとユベールの供儀論、フレイザーの共感呪術論などをひとつの理論的な観点から総合しようと試みた作品である。リーチ（1981）はグリアスンの交易論にはまったく言及していないが、両者の議論には実に高い親和性がある。

これを説明するために、サーリンズ（1984）の「未開交換の社会学」に言及したい。この論文で、サーリンズは対外交渉をも視野に入れて互酬性概念の再検討を試みた。そして、「一般化された互酬性」、「均衡のとれた互酬性」、「否定的互酬性」、という三つの用語を編み出した。「一般化された互酬性」とは相互扶助を基調にして、対内道徳に支えられた交換の様態だということができる。「均衡のとれた互酬性」とは没人格的な等価交換を基調にており、具体的には沈黙交易や市にみられる交換の様態を指す。「否定的互酬性」は、敵対関係を基調にしており、詐欺や略奪など対外道徳に基づく交換の様態ということができる。とみに有名なのは、これら三つの互酬性は法則性をもって地理的に分布することを指摘した点である。すなわち、自己の住居を起点とし、そこから遠ざかるにつれて、「一般化された互酬性」から「均衡のとれた互酬性」をへて「否定的互酬性」へと分布し、「均衡のとれた互酬性」は自己の属する集団と隣接集団との境界線上に見出されるというのである。グリアスン、ウェーバー、サーリンズの議論をまとめて理念図を描くと図1のようになる。見ておわかりいただけると思う。これはリーチ（1981；76）が、通過儀礼や供儀を説明する際に有効なモデルとして活用したユウラー図とまったく一致するのである。なぜリーチにグリアスンへの言及がないのか不思議なくらいである。

文化人類学とは宗教的あるいは形而上学的観念をおもにあつかう学問であると私に思い込ませたリーチ（1981）の著作には、集団間の対人関係や商業行為、経済活動をも視野に含めうる

図1 グリアスン、ウェーバー、サーリンズの議論を統合した理念図



懐の深さがあることをグリアスンは示していると思う。これは、より古い著作が新しい著作の可能性を開示するという事態であり、時間の流れに逆行した見方なのだろうけれども。

リーチ（1981）は、草創期以来の古典的業績を参照して、レヴィ＝ストロースのいう「神話—論理」を説明している。「神話—論理」とはまさに弁証法的思考の一形態であり、文化人類学という学問は、草創期から弁証法的に考え、理論を練り上げてきたことをリーチは教えてくれる。そして、論理構成においてリーチの著作とまさに軌を一にする本書『沈黙交易』は、相異なる集団間の交渉という弁証法的過程をみつかうと同時に、弁証法的思考をもってそれを解き明かそうとしている作品であるといえると思う。

7 おわりに

文化人類学における近年の特徴のひとつに、ある文化の成り立ちを、他の文化や他の集団との交渉という文脈のなかで、常に変化し形作られるものとして理解しようとする態度があると述べた。これは文化を、静的にとらえるのではなく、まさに弁証法的にとらえようとする態度である。そして、文化人類学には、草創期から今日に至るまで、人間の生を弁証法的な過程のなかにあるものとして観察し、弁証法的思考によってそれを説明しようとする側面があったことをリーチ（1981）は教えてくれている。

近年、文化人類学は手厳しい批判を受けてきた。しかし、こうした批判がこの学問の蓄積のすべてを無に帰したわけではないと考える。むしろこうした批判が開いた新しい問題や関心に向き合うとき、先達が開いた認識は私たちに豊かな示唆を与えてくれるのではないかと考えた。古典が与えてくれる豊かな示唆を新しい問題や関心のなかで生かすことができるか否かは

私たちにかかっているのだろう。そして、本書『沈黙交易』は、この学問の古典的蓄積と今日的課題とを結びつけてくれる重要な著作のひとつではないかと私は考えているのである。

参考文献

- ウェーバー, M.
 1954 『一般社会経済史要論 上巻』黒正巖ほか訳 岩波書店
 1955 『一般社会経済史要論 下巻』黒正巖ほか訳 岩波書店
 1965 『都市の類型学』世良晃志郎訳 創文社
 1974 『法社会学』世良晃志郎訳 創文社
- エルツ, R.
 2001 『右手の優越』吉田禎吾ほか訳 筑摩書房
- 岡 正雄
 1994 「異人その他ー古代経済史研究序説草案控えー」大林太良編『岡正雄論文集 異人その他』
 pp. 77-121 岩波書店
- カーティン, フィリップ J.
 2002 『異文化間交易の世界史』NTT出版
- 栗本 慎一郎
 1979 「沈黙交易」『経済人類学』pp. 99-119 東洋経済新報社
- サーリンズ, M.
 1984 「未開交換の社会学」『石器時代の経済学』山内和訳 pp.223-285 法政大学出版局
- ファン・ヘネップ, A.
 1977 『通過儀礼』綾部恒雄ほか訳 弘文堂
- フレイザー, J.
 1951 『金枝篇(全五冊)』永橋卓介訳 岩波書店
- マーカス, G. E.、フィッシャー, M. M. J.
 1989 『文化批判としての人類学』永渕康之訳 紀伊国屋書店
- モース, M.
 1973 「贈与論」『社会学と人類学 I』有地亨ほか訳 pp.219-400 弘文堂
- モース, M.、ユベール, A.
 1983 『供儀』小関藤一郎訳 法政大学出版局
- リーチ, E.
 1981 『文化とコミュニケーション』青木保ほか訳 紀伊国屋書店
- Dalton, G.
 1980 Introduction. *Resarch in Economic Anthropology*. Vol. 3 pp. vii-xiii
- Price, J. A.
 1980 On Silent Trade. *Resarch in Economic Anthropology*. Vol. 3 pp. 75-96
- Said, E. W.
 1989 Representing the Colonized: Anthropology's Interlocutors. *Critical Inquiry*. 15. pp. 205-225
 (のぐち・あきひろ／北海道大学大学院)